

露出系ファッションに対する女性の羞恥感

○菅原健介 (Sugawara Kensuke)・五藤 睦子(Nobuko Goto)

(聖心女子大学)

((株)ワコールホールディングス)

キーワード：羞恥心、露出系ファッション、身体意識、性的刺激価

<問題>

近年、キャミソール、ローライズジーンズ、見せる下着など、従来は隠してきた身体の一部をあえて露出するファッションが広がりを見せている。こうした露出に関して女性たちはどのような意識を持っているのだろうか。

人間は自己の身体を被服によって覆い隠すという、他の動物には見られない奇妙な行動パターンを持っている。被服の発生を「羞恥心」に求める考え方は否定されているものの(Kaiser, 1985)、多くの文化の人々が身体の露出に対して恥じらいを感じていることは事実である。さらに、Duerr (1988) よれば、被服を着用しない文化においても、特に、女性の身体を男性が注視する行為はタブーとされており、こうした“視線のマナー”によって、裸体でいられる環境が担保されているとする。こうした文化的仕組みは、公衆浴場においても、ヌーディストのキャンプにおいても同様に認められる。

このように、人類社会において、身体を人目にさらすことは巧みに避けられているが、その理由としてしばしば指摘されるのが「性的刺激の管理」である。Morris (1967)によれば、共同体の基盤として男女の永続的な婚姻関係が機能するようになった結果、婚姻関係外の性的接触は社会的秩序を乱す要因として避ける必要が生じた。それゆえ、異性を無用に性的に刺激しないよう人前において身体（特に性器）を隠すという行動パターンが形成されたという。

また、菅原(2003)は、被服の着用自体は別な理由で習慣化されたが、その結果として、被服を脱ぐことはことさら性的な意味を帯び、それゆえ、人前で裸体をさらす者は社会的秩序の破壊者として排斥されるようになったと指摘している。排斥の対象になる危険は、自己イメージの“番人”である羞恥心を刺激し、「恥ずかしい」という感情を喚起させる。すなわち、人は「自己の性的刺激価」が高揚することに羞恥を覚え、それゆえ、身体の露出を抑制していると考えることができる。

こうした視点から、現代の露出系ファッションを考えるとき、以下のような疑問が生じる。

1) 羞恥感は露出系ファッションの利用を抑制する要因となっているのだろうか。

2) もし、そうだとすれば、それは「自己の性的な刺激価」が高まることへの羞恥感なのだろうか。あるいは、他のことへの羞恥感なのだろうか。

本研究では、首都圏と近畿圏に居住する女性たちへの質問紙調査から、露出系ファッションをめぐる行動や意識の実態を把握するとともに、露出系ファッションへの羞恥感の内容を明らかにしてゆくことで、上記の問題を考察することを目的とする。

<方法>

予備調査：20代～50代の女性、100名に予備調査を行い、ファッションに関する恥ずかしさの程度や恥ずかしいと感じる人物や状況などについて自由記述を求めた。これらを基に本調査を行った。

本調査：首都圏と近畿圏に在住の18歳から59歳までの女性、1030名が調査対象となった。ウェブ調査用モニターとして登録されている人物のリストから、居住地、年齢の条件に合致したサンプルを抽出し、ウェブ上に作成された調査項目に回答を求めた。

調査項目の主な内容は以下の通りである。

- 1) 露出系ファッションの利用度
- 2) 身体露出への羞恥感
- 3) 露出系ファッション時の自己像と従来の自己像との乖離感
- 3) 露出系ファッション観：
 - ・性的対象意識
 - ・女性としての品性
 - ・性的アピールの道具性
 - ・身体的ステイタス
 - ・ファッションアイテム
- 4) 下着観
- 5) 個人特性
- 6) 年齢、学歴

<結果と考察>

1. 露出系ファッションの利用や意識の構造と年齢差

「肩を出したキャミソールやベアトップ」「素肌や下着が見えるほどのローライズ」「背中が見せるベアバックやホル

ターネック」などの8項目の着用経験数を、露出系ファッションの利用度とした。年齢との相関係数は-.394(p<.001)と負の相関が認められた。

また、14項目の身体露出の羞恥度に関して、因子分析を行ったところ、「バストップがブラやアウターにひびく」「かがんだとき胸の谷間が見える」など、意図せずに身体や下着が「見える因子」と、「ブラのトップを付け替えて見せるファッション」「胸元が広く開いた服」「ロースパッツからおへそや肌が見えるファッション」など、意図的に身体や下着を「見せる因子」が抽出され、それぞれを合成得点化した。年齢との相関を見ると、前者は-.166と弱い負の相関であるのに対して、後者は.356と中程度の相関が得られた。“見える”ことへの羞恥はいずれの年齢においても高い傾向が見られるが、“見せる”ことへの羞恥感はや若い年齢層ほど低いことが示された。

2. 露出系ファッションの利用と羞恥感を規定する意識

羞恥感は社会的期待と自己像とのズレによって生じる。従って、露出系ファッションを身につけた自己の姿（あるいはその想像）が、社会から受容されてきた従来の自己像と食い違うとき、羞恥感が高まり露出系ファッションの利用は抑制されると考えられる。また、「自己像とのズレ」は露出系ファッションの性質や機能をどのように認識しているか（露出系ファッション観）によって強く影響されると考えられる。そこで、本研究では、「利用度←羞恥←自己像とのズレ←露出系ファッション観」という因果モデルを仮定し、個々の要因の影響について検討した。また、露出系ファッションの利用や羞恥感と関連が見られた年齢の要因の効果についても合わせて検討する。

図1は諸変数間のパス図である。露出系ファッションの「利用度」は、そうした被服を着用することへの「羞恥感」の強さによって強く抑制されていた。また、「羞恥感」の強さは、「露出系ファッションを着た自分と普段の自己イメージとのズレ」によって規定されており、従来から指摘されてきた羞恥による行動制御のメカニズムがここでも確認された。

今回、最も興味深いのは、どのような露出系ファッションのどのようなイメージが、自己イメージとの間に乖離を引き起こしやすいかという問題である。まず、「変に異性を刺激してしまいそう」など、自己の“性的な対象化”や、「女性はむやみに人前で身体をさらすべきではない」といった“清純さの欠如”のイメージの影響が大きかった。また、両イメージは相関が高く、ともに露出系ファッションの性的刺激性を意味すると考えられる。「身体を露出すれば異性を性的に刺激し、結果として社会から非難される」という懸念が利用度を抑制していることが示され、先に述べた「性的刺激管理説」が裏付けられたと言えよう。

しかし、「異性の関心を集められる」といった性的アピールの関与は薄く一方で、「スタイルのよい人しか着れない」といった“身体的ステータス観”が露出系ファッションを着用する上でのプレッシャーとなっていること、さらに、「露出系ファッションは、かわいい、かっこいい」といったオシャレイメージは、「自己像とのズレ」や「羞恥感」を低下させ、「利用度」を高めるなど、重要な促進要因になっていることが分かった。露出系ファッションの利用は単に男性の視線に対する“性的”な要因だけではなく、女性社会内における美学的、文化的な諸要因も密接に関連している様子がうかがえる。

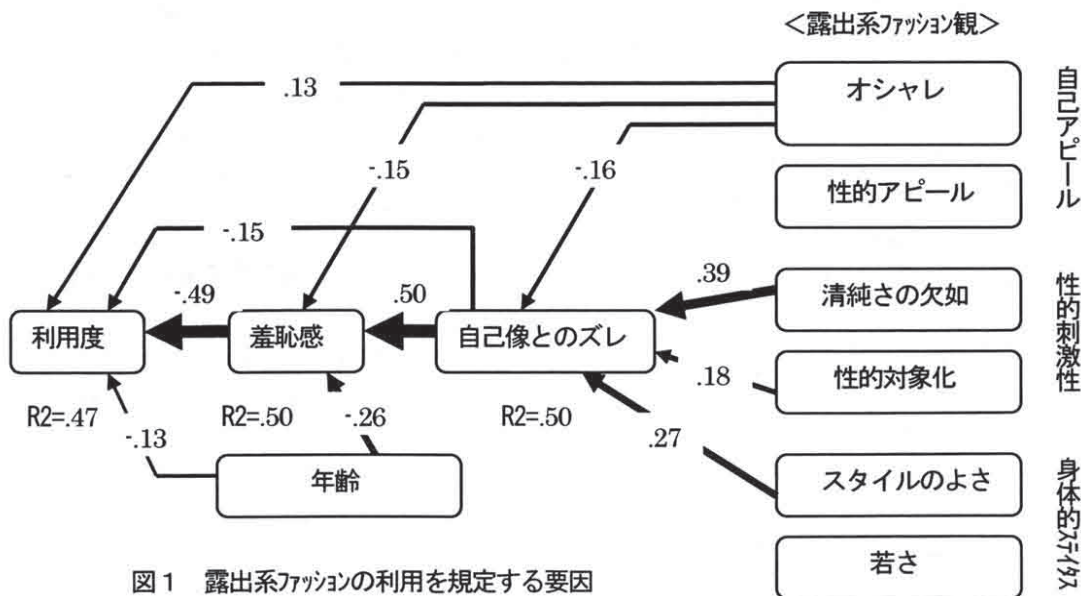


図1 露出系ファッションの利用を規定する要因